

就労困難起業に活路

筋肉・疲労の病気 県内6人 せっけん販売

全身の筋肉が激しく痛む「線維筋痛症」や、立てないほどの強い疲労感が続く「慢性疲労症候群」の県内の患者ら6人が、手作りのせっけんなどを販売する会社を立ち上げた。体調に波があり、就労の壁が高いことから、それぞれの特技を持ち寄って在宅で仕事ができるようにした。代表社員の鳥井謙祐さん(48)は、「障害や病気で就労できず、困っている人のモデルケースになりたい」と意気込む。(藤田愛夏)

会社名は「Peace Piece of Peace(平和のひとかげら)」。鳥井さんが9年前に設立した会社を母体に、今年2月に事業と社員を一新した。社員は現在、患者と健常者合わせて6人。せっけん製作、会計、商品管

理などの業務は全て在宅で実施し、打ち合わせは主にオンラインで行っている。鳥井さんは線維筋痛症や慢性疲労症候群の患者を支援するNPO法人「えがお」(高岡市)の理事長を務め、患者の就労のサポートにも



商品化したせっけんとハーバリウムの容器を手にする鳥井さん(中央)と社員ら(富山市)

取り組んできた。

会社設立のきっかけは、昨年10月に「えがお」の活動で開いたワークショップだった。共生型社会のまちづくりに向け、身体障害者と富山短大生が地元の魅力発信をテーマに商品を開発できないか話し合ったところ、地元の素材を使ったせっけん作りのアイデアが浮かんだ。

鳥井さんによると、線維筋痛症や慢性疲労症候群の患者は体調に波があり、外出できない日もある。そこで「就労が難しければ、起業してみよう」と、11月下旬から会社のスタートに向け、動き始めた。

せっけん製作を担当したのは、慢性疲労症候群で悩む千葉雅代さん(58)。せっけん作りのノウハウを持ち、富山米の「富富富」の米ぬか、射水市黒河(小杉)の竹炭、富山を代表する老舗酒造の酒かすなどを取り入れ、5種類を商品化した。素材や色合い、無添加にこだわりの、全てに滑川の海洋

深層水を使っている。

花とオイルを使った「ハーバリウム」の手指消毒液用容器も作った。4月ごろからクラウドファンディングを通じて販売するほか、県のアンテナショップ「日本橋とやま館」(東京)での販売も予定する。

千葉さんは「自分たちでルールを決め、スケジューリングも柔軟にできる」と新しい働き方に満足。鳥井さんは「個人の強みを生かして、働く人や関わる人を増やしていきたい」と語る。せっけんは、一つ税込み2420円(送料別)。